

井伏鱒二全集

第四卷

筑摩書房

井伏鱒二全集第四卷

昭和四十二年五月二十日發行

著者 井 伏 鱒 二

發行者 竹之内靜雄

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑摩書房

電話東京例七六五一(代表)

振替 東京 四 一 二 三

印刷 株式會社 精興社
製本 和田製本株式會社

目 次

山峽風物誌	三
復員者の噂	三
貸間あり	四七
白毛	二二八
虎松日誌	二三四
普門院さん	二五〇
満身瘡痍	二六九
爺さん婆さん	二八四
遙拜隊長	二九六
鳥の巢	三七
本日休診	三三五
丑寅爺さん	四一四
片棒かつぎ	四三九
パイプについて	四六三

加山君のこと	四七四
--------	-----

解題	四九一
----	-----

井伏鱒二全集

第四卷

山峽風物誌

登山、スキー、狩獵。こんなことには縁が遠いので、私は山の人にはあまり知りあひがない。山の人といふのは（いま私のいふ意味は）山に生れ山に暮して山で死ぬ、いはば山のぬしと云つてもいいやうな人のことである。たとへば、一般の山岳愛好家に馴染のふかい上高地の常さん庄さんといふやうな人のことである。この人などは上高地のぬしと云つてもいいだらう。穂高に登る人は、たいてい常さん庄さんに案内を頼むさうである。しかし私は穂高に登つたことはない。あのどつしりとして厳しさうな山は、麓から仰いで見るだけでも私なんか足のすくむ思ひがする。それに常さん庄さんと對談してみても、山登りに経験のない私には共通の話がないのである。いつか私たちが上高地の宿で一度對談したときに、私の連れの尾崎一雄が常さんにこんなことを云つた。

「あなたは、いつか慶應の登山部の學生に招かれて、東京見物に行つたことがあるさうですね。ところが、銀座へ案内してもらふと、あなたは、しょつちゆう立ちどまつて、鞋わらじの紐ばかり締めなほしたさうですね。

常吉、しつかりしろと案内の學生が云ふと、いや、今日は足がすくんでいけねえと云つたさうですね。」

すると常吉老人は苦笑ひして答へた。

「はい、銀座の散歩かね。東京の道路はどうも、足場が悪くつていけねえ。」

この返答をきいたとき、私はいかにも山のぬしの聲咳（せいかい）に接してゐるといふ感じを受けた。

そのほかにもう一人、いかにも山のぬしといった感じの人に會つたことがある。よほど前に、太宰治と御坂峠の宿から三ツ峠まで散歩に出かけると、急に濃霧が湧き起つて來て、見る見る山全體を包んでしまつた。しかし僅かに足もとは見えた。もし見えなければ遭難したかもわからない。私たちは頂上の山小屋までたどりついた。山小屋は三軒あつた。その一軒の、通稱三ツ峠の髯の爺さんといふ人の山小屋を訪ねた。爺さんとその連れあひの婆さんは、私たちのドテラの縞がらを見て、御坂峠の茶店の泊り客であることをすぐに見ぬいてお茶を出してくれた。爺さんは話しずきであつた。この山に住むクロと愛稱されてゐる鷺が、猿の群れを襲ふときの鳥獸合戦談を詳細にわたつて話してくれた。この髯の爺さんは八十何年もこの山に住んでゐると云つた。それが足腰も達者であつた。

「お前さんがた、富士山を見に來なすつたんだらうが、このガスでは、今日はもう見えないよ。もしガスがなかつたら、富士山はこの方角に、こんな工合に見える。」

髯の爺さんはさう云つて、壁に掛けてあつた額ぶち入りの大きな富士山の寫眞を土間の外に持つて出た。何をするのだらうと見てゐると、爺さんはその寫眞を崖のはなに持つて行つて岩に立てかけた。

「お前さんがた、さあここへおいで。ちやうど富士山は、この見當に、こんな工合に見える。これがね、こ

の三ツ峠の、ここから見た夏の富士だ。今日のところは、この寫眞で我慢しておくれ。實物にそっくりだと思ひなさい。」

爺さんのさういふ説明で、私たちは濃霧に煙る岩角の大寫眞を見た。私は非常に感銘のふかい富士山だと爺さんに云つた。何か風韻のありげなもてなしぶりに、つい私はさう云つた。この髯の爺さんは、最近九十何歳で亡くなつたさうである。

まだもう一人、山のぬしを私は知つてゐる。寒川谿谷の久井といふところから、また別の谷間にはひつて行つた米山筋の米山さんと云ふ老人である。以前この人は「山峽記録」といふ小さな書物を自費出版して、何かの名簿によつて誰彼の區別なしに郵送して配つたことがある。私にもそれが届いたが、後になつて私は寒川谿谷に行つたとき、偶然にも、その翁宿といふ部落の煙草屋で米山さんに逢つた。

寒川谿谷は、戦争前までは「仙境」または「祕境」と云はれてゐた。川魚の釣師たちは、「ヤマメの寶庫」と云つてゐた。私は戦争中その谷川へ釣りに行つて、三晩ほど翁宿の釣宿に泊つた。二日目の晩に持參の煙草がなくなつたが、物堅い土地だから、煙草屋も翌日の賣るぶんを前の晩に賣るやうなことはしなかつた。しかし、夜の十二時が過ぎると賣つてくれる。部落の人たちは夕食すぎから煙草屋の圍爐裡ゐろりのまはりに集まつて、無駄話をしながら十二時になるのを待つてゐる。煙草のこんな販賣の仕方は、よそでは私は見たことがない。夜の十一時ごろ、私は隣室の年とつた客といつしよに煙草屋へ出かけてゆき、その店に備へつけの帳面に自分の姓名と住所を書いた。私の連れはそれを見て、

「ははあ、貴方ですか。いつか『山峽記録』を送りまして、懇切な御禮狀を頂きました。私は『山峽記録』

の米山で御座います。」

と自己紹介した。

米山老人もこの「寶庫」へ釣りに來てゐるのだと云つた。翌日は一日ぢゆういつしよに釣をしたが、とてもこちらは釣師として米山さんの足もとにも近寄ることができなかつた。私は岩に姿をかくして慎重なやりかたで釣つてゐた。米山さんは、私の釣つて行くあとから川の中をざぶざぶ歩いて釣つてゐた。それでも私の十倍以上も上げるのである。技量の差はおそろしい。米山さんの説によると、ヤマメといふ魚は、習性さへ知つてしまへば金魚を釣るのと同じことださうである。私は釣竿で淵の水を引つかきまはしたいほどであつた。しかし幾ら口惜しくても仕様がなない。「無理は邪道です」と、米山さんは釣の骨法について云つた。

米山さんの本職は醫者ださうである。しかし不便な土地のために診察を受けに來る人は滅多にゐないので、いつもは息子さんの製材所を見廻つてゐるさうである。自分ひとりだけ別居して、自分で米山筋と名づけた山麓の間の小屋に住んでゐるのだと云つてゐた。

その日の釣を終つてから、宿屋で夕食をいつしよに食べた。寢床も並べて敷いてもらつた。寢床にはひつてから、米山さんは猿のことについて話した。私は眠いのを我慢しながらきいてゐた。米山さんは猿の啼聲をいろいろと實際に眞似て發聲してみせたりして、熱心にその聲の區別について説明した。猿の聲は必ずAの發音で終つてゐるさうである。Y E I A・Y E I A・K Y A・K Y A、またはM U A・M U Aといふやうに、必ず語尾はAで終るさうである。無論、甲音かんおんの場合は非常をつげる聲である。その著書の「山峽記錄」には、猿のことでは農作物の蒙る被害事項だけを書いてあつた。

「おやすみなさい、といふのは、猿はどう云ひますか。」

私が眠さにたまりかねてたづねると、

「おやすみなさい？ はあ、なるほど、では、おやすみなさい。しかし、猿は晝寢の名人です。」

と米山さんが云つた。

翌朝、私のまだ眠つてゐるうちに、米山さんは宿を出て行つたが、私の魚籃いさなにヤマメを二十ぴきばかり入れて行つたのが後でわかつた。そのヤマメはみんな脊鰭のわきを切り開いてあつた。宿の人の話では、さういふ風に脊を開いて神經の筋を抜きとつておくと、この魚は痛みの足が遅いといふのが米山さんの持説ださうである。しかし釣の書物などいろいろ調べても、そんなまじなひのやうなことについては言及されてゐない。米山さんの迷信かもしれないのである。

私は三年あまり田舎に疎開して、去年東京に轉入した。そして私の上京第一番に着手しようと企てたのは、かつて戦争のはじまる前に小山書店と約束しておいた「甲斐風土記」執筆の仕事である。私は甲州の山峽風物について書かうと思つた。甲州の山峽は、各自に地質が異つてゐるために、風物がそれぞれ變つてゐて興趣が複雑である。たとへば昇仙峽は花崗岩臺地で赤松が多い。その隣の増富谿谷は安山岩臺地で樹木は潤葉樹が多い。住む人の風儀もちがつてゐる。それを書きわけて行くためには、一つ一つの山峽のぬしに直接面談した上で、談話筆記でもして來て整理するのが便法である。さつそく私は三ツ峠の髯の爺さんに手紙を出した。返事は來なかつた。それで御坂峠の茶店に手紙で問合せみると、あの髯の爺さんは敗戦の前に九十何歳の高齡で亡くなつたといふ返事が來た。米山筋の米山さんからは返事が來た。例の「ヤマメの寶庫」の

釣宿で落合せたいといふ文面であつたので、私は米山さんの意中を察して釣道具と餌にするイクラを用意して出發した。ノート・ブックも忘れなかつた。電報で私は到着の日を通知した。

次の文章は、翁宿の宿で米山さんの話したのを私が筆記したものである。

——あれから私は、ひとりぼつちの暮しが難しくなりまして、倅の家に参りました。久井部落の近くです。なにしろ人里離れたところで、ひとりぼつちでは、配給生活は難しいので御座います。都會の人が田舎へ疎開するのと反對に、私は邊鄙な人煙まれなところから、幾らか人のゐるところに移つたやうなわけでした。

これは疎開の反對であります、倅は私のことを疎開者として役場に届けてくれました。役場の人も、時節がら疎開者として届けてよろしいと云つてくれたのであります。これには孫たちが喜びました。うちにも疎開者がゐると申しまして、人なみでありたい子供の氣持に満足を與へたやうなわけで御座います。

そこで、私は疎開いたしますと、近所の甚作といふ六十近い男と釣友達になりました。この者は二十年ばかり前に二度か三度か私の患者になつたことがあります、もうそのころから、この男は腕のいい獵師だといふ評判をとつてをりました。いつたいにこの谷合では、時をり猪が出沒しましてイモ畑を荒らして困ります。役所でもその點を認めまして、獵期でなくとも獵を許します。猪がイモ畑を荒らすときには、先づ猪の一家の親だまが、夜なかに畑へ偵察に参ります。さうして、ここにイモがあると見つけると、一家眷族を引率して來て一夜のうちに畑を掘り起します。ちやうどそれが鋤で耕したやうに畑の土をすつかり掘り起して、イモを跡かたもなく喰ひつくしてしまひます。いまのところ甚作が健在なうちは、どうにか猪の被害の一部

分だけは喰ひとめることが出来ますが、もしあれに萬一のことでもあつたら、この谷間のイモは全滅です。たいてい腕つこきの若いものは、今度の戦さで亡くなつてしまひました。それからまた、若い者が兵隊にとられた家では獵銃を供出させられてゐますので、若い者が歸つて來ても仕事にはならないのであります。

甚作の家は谷川のそばに御座います。夏の夜は河鹿が鳴いて煩さくて困りますが、甚作方の裏手には恰好のいい淵がありまして、私はよくその淵に出かけました。或る日、もうそのころは野苺の實の熟する季節は過ぎてをりましたが、私がその淵のところで一ぷくしてをりますと、あたりが急に森閑としたやうな氣配になりました。それに續いて、ざわざわと山から石を轉がすやうな音がきこえました。何百何千もの石を、一度に轉がすやうな音でありました。見ると、百びきも、それ以上もの猿の群れが、山からどろどろと降りて來てゐるのが目につきました。こんな大群の猿は、私も永くこの谷合に住んでをりますが、子供のとき二度か三度ぐらゐ見ただけでありました。御存じかもしれませぬが、猿の大群は猪や熊よりも怖ろしい。悪くすると人間に跳びかかつて來て、寄つてたかつて人間の腋の下を擦ります。あの毛の生えた手で、あの長い爪で、擦られると想像するだけでも擦つたくなります。

よほど前に、もう五十年も前のことになりましたが、日本畫を描く若い畫家がこの谷合に來て寫生してゐると、いきなり猿の大群がやつて參りまして、その畫家を擦つて擦つて、擦り殺した實話も御座います。その死體を警察が見て、誰か悪い人間が殺して行つたんだらうと部落のものに疑ひをかけましたが、警察關係の老練な醫者が來て猿の仕業だと診斷をくだしました。その畫家の着物の袖のなかに猿の毛が少し見つかったのと、もう一つ確かな證據には、その畫家の手の指に血のかたまりといつしよに猿の毛が貼りついてをりま

した。その畫家の恩師にあたる或る偉い畫家が、この村の長老のところに挨拶に来て云ひますには、昔の畫家が深山幽谷に寫生に行くときには、たいてい獵師を連れて行つたものだ。さもないければ、繪筆をとる者でも脇差をさして山にはひつたものだ。手ぬかりは自分の弟子の方にあつた。また自分も、この谿谷がこんなに深いところだとは想像もしなかつた。つい迂濶であつた。ことに村の人に對して御迷惑をかけたことは相すまない。自分も大事な弟子を失つて悲嘆にくれてゐる。どうか許してもらひたいと申しまして、お詫のしるしに繪を描いて行つたさうでありました。その繪は、後から大變な値が出て參りまして、甲府の談露館といふ旅館に買はれて行きました。あの旅館には、同じ畫家の描いた繪が相當にたくさん集まつてゐたさうです。御存じの通り、今度の戰災であの旅館も焼けました。當時、私なんかのまだ子供のときの出來事でした、その偉い畫家の名前を覚えておかなかつたのは非常に残念なことで御座います。先年、まだ戰爭の起る前に、二度ばかり私も談露館に泊つたことがあります、あの旅館には富岡鐵齋の繪がたくさんありました。それから巖谷一六の屏風がありました。しかし五十年前のころ、鐵齋が東都において門戸を張つてをつたとは思はれません。誰だらうか、あのとき謝りに來た腰の低い畫家は、いつたい誰だらう。私は不圖してさう思ふことが御座います。

話が横にそれましたが、私が甚作方の裏手で見ました猿の大群は、なだれのやうに山から駆けおりて谷川のほとりに來ると、また山のなかに駆けこみました。よく見ると、高い木の枝に三びきの猿が残つて、胡坐をかいた恰好で何か偵察の役目をしてをるやうに見えました。私は釣竿や魚籃を川つぶちに置いたまま、自分は一介の洗濯婆さんであるといふやうに猿に思はせるために、こそこそと藪疊のかげにかくれて行きました。

た。

幸ひ甚作は縁側に腰をかけて、物思ひに耽つてをりました。甚作のおかみさんが、その數日前にちよつとした間違ひがあつて里に歸つてゐましたので、甚作には屈託ごとがあつたので御座います。

「猿がをるぞ。いま三びき、木の枝にをる。お前、あれを撃たんかい。」

私は息をきらしながら甚作に云ひました。

「三びき？ ああ、あの三びき連れの猿は、悪いやつぢや。」

と甚作が云ひました。

甚作は壁にかけてあつた獵銃を取つて來て、彈丸をこめました。

「あそこの川向うの、胡桃くるみの木の枝にをる。淵の向側ぢや。」

私は猿のをる場所を甚作に教へました。

甚作は鐵砲を持つて、物かげに身を忍ばせながら川つぶちの藪疊に近づいて行きました。すると「エイアイ・エイアイ……」といふ猿の啼聲が、鐵砲の音と同時にきこえました。これは彈丸の命中したときの啼聲ではないやうでしたが、

「たしかに、手應へあつた。」

と甚作は申します。

そこへ、どこかに遊びに行つてゐた甚作の飼犬が、往還をまつしぐらに驅け戻つて參りました。銃聲をきいて驅けつけたのであります。